

「
告
白
」

ナ
オ

性別	性別	性別	性別	性別	魚屋	晴喜	古賀	武田	庵野	山口	庵野	後藤	浅倉	庵野	登場人物
②	①	③	②	①		2	美和	壕	治	野乃	裕子	俊介	祐樹	晴喜	
						(30)	(28)	(35)	(43)	(14)	(61)	(30)	(48)	(30)	
						葛藤	教師	教師	晴喜の父親				教師	無職	
						中のもう一人の晴喜				晴喜の友人	晴喜の母親	晴喜の友人		中学2年生	

晴	野	男	生	生	先	先	先	生	生	生	生	店
喜	乃	性	徒	徒	生	生	生	徒	徒	徒	徒	員
の	の	③	⑥	⑤	③	②	①	④	③	②	①	
ク	母											喫
ラ	親											茶
ス												店
メ												の
イ												ス
ト												タ
達												ッ
												フ

○商店街・通路

賑やかな商店街を横目に、庵野晴喜（

30）は道の中央を歩く。

彼は黒いズボンに少しシワになった白

いTシャツを着ており、鞆を持たず、

髪もセットをしていない。

数多の店から快活な声が聞こえてくる。

魚屋

「安いよ安いよ！ この鮪がなんとた

ったの千円！ こんなに安いのは今だ

けだよ！」

女性

① 「すっごくその服似合ってるよ！ 彼

氏きつと喜ぶよ！」

女性

② 「えーそうかなー？ 嬉しい！ 買った

っちゃう！」

晴喜、女性の方をちら見する。

男性

① 「いやー、お若いですね。いつまでた

っても！」

女性

③ 「あー、そう？ 私もまだ捨てたも

んじゃないかしらねー。ほほほ」

はあっとため息をつく晴喜。

スマホを片手にハローワークを見る。

その時、後藤俊介（30）からlin

eで「明日、現地集合な」と通知が届

く。

晴喜 「……」

すれ違う中年サラリーマンと肩がぶつ

かる。

男性② 「どこ見てんだ！ 気をつけんか！」

と、晴喜を怒鳴る。

晴喜、ふてくされた顔で、

晴喜 「……あんなこそ」

と、小声で言う。

男性② 「ああ！ 今なんだった！」

晴喜 「あんたも気をつけろって言ってんだ

よ！」

晴喜の大声に驚く周辺の人々、全員が

晴喜の方を見る。

少しの沈黙の後、人々がこそこそと話

し始める。

人々 「なに？ 喧嘩？」

「もおーやめてよねこんなところで」
「あの人が知ってる。庵野さんちの。あの年で……。親御さん、大変ね」

と、小声で話し出す。

晴喜、舌打ちをして、中年サラリーマンを後にして走り出す。

男性② 「ちょおい！ どこ行くんだ！」

聞く耳を持たず走り続ける晴喜、人ごみを潜り抜け、商店街の出入口で立ち止まる。

○商店街・出入口

晴喜 「……」

晴喜の目の前に、すらりとしたやせ型の背の高い男性、浅倉祐樹（48）が立っている。

祐樹 「ハローですよ！ 晴喜さん。お元気

ですか？」

と笑みを浮かべながら挨拶をする。

晴喜、一瞬驚くも、平然とした顔つきになる。

晴喜 「先生、何でいるんですか？」

冷静に質問をする晴喜。

祐樹 「なぜかって？ 決まっているでしょ。あなたがまーた悪さをしたからですよ。」

と、笑いながら質問に答える祐樹。

祐樹 「生徒を正すのは、教師の役目のひとつですからね。晴喜さん。ぶつかってしまったら、まずごめんなさいでしょう。」

晴喜、少し考えて口を開く。

晴喜 「先生、それだと嘘になります。ごめんなさいだなんて思ってますんよ。」

祐樹 「だーめですよ。そんなの。たとえば思っているなくても、一言そのように言うだけ。で、穏便に済んだはずですよ。」

と、笑みを浮かべながら言う。

晴喜 「嫌です。」

とそっぽを向く。

祐樹 「もう、頑固さんですねえ」

と困った顔をする。

晴喜 「先生、先生は俺のことよく知ってい

ますよね」

祐樹 「……嘘が嫌い。ですね？」

俯く晴喜。

晴喜 「謝ると嘘になります。そっちの方が

悪いことじゃないですか？」

と、真剣な眼差しで祐樹を見つめる。

祐樹、こめかみをポリポリと人差し指

でかきながら、数秒間考え込み話し始

める。

祐樹 「晴喜さん。このあとお時間あります

？一緒にカフェに行きませうよう！」

晴喜 「はい？」

唐突の誘いに驚く目をする晴喜。

祐樹 「カフェですよ！そこで晴喜さんに

は特別授業を受けていただきます」

晴喜 「いや、俺お金ないし」

祐樹

「ノーノー、ノープロブレム。私の奢りです。2時間後、あの喫茶店でお待ちしておりますよ。では、グッバイです！」

祐樹、回れ右をして帰りだす。

晴喜

「はあ……」

とため息をついて、歩き出す。

○庵野家・リビング（昼）

ソファに座ってテレビニュースを見ている庵野裕子（61）。リビングのドアから晴喜が出てくる。

晴喜

「ただいま」

裕子

「……」

テレビを見つめたまま返事をしない裕子。

晴喜、一旦ポケットに入っているスマホと財布を机の上に置き、恐る恐る裕子に話しかける。

晴喜

「あの、お願いがあるんだけど」

裕子 「仕事、見つかった？」

さえぎるように質問をする裕子。

晴喜、少しの沈黙のあと

晴喜 「まだ」

裕子 「あっそ」

と、やさぐれたように言葉を吐く

晴喜 「あのさ、お金、貸してもらえないか

な……」

裕子、ダンスから300万を取り出し、

晴喜に渡す。

晴喜 「え、なにこれ」

晴喜、驚く。

裕子 「それだけあれば十分でしょう？ 今

日が巢立つ日よ。もう限界」

晴喜 「いや、そんな急すぎないか？ まだ

仕事も決まっていし」

裕子 「だからそれだけ渡してるのよ。好き

に生きればいい」

晴喜 「……」

目をつむる晴喜。

晴喜 「分かった。今日の夜には出ていくよ」

と、自分の部屋に行き、出かける支度を
をする。

晴喜 「じゃあ、少しだけ出かけてくる。安

心して、帰ったら出ていく準備するよ」

玄関のドアを閉じる晴喜。

裕子、顔を手で覆い隠す。

○喫茶店・店前

晴喜、到着する。ポケットに携帯と財

布を入れて、バッグは持っていない。

晴喜、一回深呼吸をする。

祐樹 「ハローですよ！ 晴喜さん。お元気

ですか？」

祐樹が近づいてくる。

晴喜 「先生、この顔を見てもなお元気に見

えますか？」

祐樹 「いやー、全然！」

と、笑いだす祐樹。

晴喜 「茶化さないでください」

と、そっぽを向いて言う晴喜。
祐樹 「これはこれは、失礼しました。ささ

、中に入りましたよ」

と、喫茶店の中に入っていく祐樹。

そのあとをしぶしぶついていく晴喜。

○同・二人席

店員 「こちらお冷でございます。お決まり
になりましたら、そちらのベルでお呼
びください」

と、水の入ったコップを1つ机の上に
おく店員。

晴喜 「コーヒー2つ」

と、店員が去ろうとする瞬間に注文を
する。

店員 「おかわり可能ですか？」

と、少し驚いた顔をする。

晴喜 「大丈夫」

店員 「かしこまりました」

店員が去っていくと同時に祐樹が口を

開く。

祐樹

「久しぶりですねーここ。確かこの前一緒に来たのは、君がもっと小さいときでしたね！時の流れは早いものです」

と、周りを見渡して言う。

店内は客が点々としており、本を読む者、談笑をする者、コーヒーに角砂糖を入れる者がいる。

晴喜

「どうでもいいですよ。そんなこと」

祐樹

「もおー、ドライですネー晴喜さん。昔はあんなに可愛かったのに。あ、もちろん今でも私からすれば可愛いですけどね！」

と、笑いながら言う。

晴喜

「特別授業って、何ですか？」

祐樹

「あなたにとって、苦痛かもしれませぬね。でも、覚えておいて欲しいことなのです」
と、急に真剣な顔になる。

二人ともお互いに見つめあう。

祐樹

「まあ、正しく言うと思いい出してほし

いことと言いますか、嘘のつき方です」

晴喜

「帰ります」

祐樹

「ちょ、ノーノー！ 早いですよー！」

と、芸人のようなりアクションをする

祐樹。

祐樹

「とってても大事なことですよ。生きて

いくうえで」

晴喜

「何を言い出すかと思えば、正気です

か？」

祐樹

「正気です」

晴喜

「さっきも聞きましたよね。俺のこと

よく知ってますよねって」

祐樹

「あなたのことをよく知っているうえ

で。です。あなたも薄々気づいている

はずですよ。嘘がないと生きていけない

ことに」

晴喜

「嘘がなくても生きていけます」

祐樹

「生きていけないっていうのは別にそ

れがなきや死んじゃうとかではなくて、
それほど大事って意味です」

晴喜 「……」

晴喜、憂鬱な表情をする。

祐樹 「晴喜さん。一口に嘘って言ってもね、

いろんな嘘があるんですよ。相手のた
めを思った嘘。自分の身を守るための
嘘。確かに、悪い嘘もあります。相手
を陥れるような嘘とかね」

晴喜 「全部が悪い嘘じゃないこと。それは

分かってますよ」

祐樹 「ではなぜ？」

「嘘をついていることに変わりがない
からです。あと、相手のことと思うとか
めんどろだし、そうやって嘘をついて、
嘘を積み重ねていくと、自分の本当の
気持ちに分からなくなりそう怖いん
です」

と顔をしかめる。

祐樹 「……ふむ、確かに。嘘をつきすぎると

そうなるかもしれないですね。晴喜さん、単純に考えればいいんです。正直に言っただけの煙たがられたり、傷つけてしまうなら嘘ついていいんです。嘘ついてしまったなんて重くとらえる必要はありません。相手にとってもいい嘘もあります」

と、一人差し指をピンと立てて話す。

晴喜 「はあ、そんなもんですかね」

と、お冷をじっと眺める。

祐樹 「で、なぜ嘘が嫌いなんですか？」

「それだけじゃないはずですよ。あなたが嘘を嫌う理由。もっと大きな原因があるでしょう」

と、真剣な表情で晴喜を見つめる。

そこに店員がコーヒを持ってくる。

店員 「おまたせしました」

と、コーヒを2杯、晴喜のそばに置く。

店員

「ごゆっくりどうぞ」

晴喜、コーヒーを1杯祐樹の前に持つていく。

晴喜

「どうぞ」

祐樹

「どうも！」

晴喜

「砂糖、6個でしたよね？」

祐樹

「覚えていてくれたのですか？嬉しいですねー！」

晴喜、机の端っこにおいてあるカスタ

ーセットから角砂糖を6個取り出して、

祐樹のコーヒーに入れる。

祐樹

「いたadakimashiyouか」

お互い同じタイミングでコーヒーをす

する。

祐樹

「それで、どうですか？」

晴喜

「……」

微動だにしない晴喜。

祐樹

「今日私は、あなたにこれ以上苦しんでほしくなくてやってきました。大丈夫

夫。あなたは別に間違っていないと思います。

ただ、現実逃避はよくない」

晴喜 「……」

晴喜、微動だにせず。

祐樹 「大丈夫。大丈夫。大丈夫。ゆっくりでいい。

あなたの気が済むまで、私はここにいますよ」

晴喜 「……」

晴喜、そっと目を閉じる。

周りの環境音が静まる。

（飾られている時計の針が反対方向に

回りだす。）

T 『16年前』

○ 同・二人席

晴喜（14）、そっと目を開く。

目の前には祐樹と山口野乃（14）が

座っている。

祐樹 「どうですか？ 反省しましたか？」

と、真剣な顔をする祐樹。

晴喜 「ごめんなさい」

しよんぼりした顔で謝る晴喜。

祐樹 「よろしい！」

と、にっこりする。

祐樹 「次からそんな嘘ついちゃだめですよ。

お友達の野乃ちゃんにも謝りなさいね」

晴喜 「はい。ごめんなさい」

野乃、そっぽを向く。

祐樹 「あちゃー、ちゃんと仲直りするんで

すよー」

と、頭のこめかみ部分を人差し指でポ

リポリとかく。

祐樹 「店員さん！ お会計おねがいします

！」

○通学路（夕）

晴喜、後藤俊介（14）と帰宅する。

俊介 「お前バカだな！ 野乃ちゃんの本盗

むなんて。しかも知らないふりしたん

だっぺな。ばれてやんの」

俊介、晴喜をからかう。

晴喜 「うるせえな」

俊介 「いつも嘘の上手いお前が、珍しいな。

猿も木から落ちるってやつだな！」

と、大笑いする。

俊介 「ところで、なんで本なんか盗んだん

だよ？」

晴喜 「あいつ、彼氏もいないくせにやけに

恋愛知識ひけらかすじゃん？　なんで

だろうと思ったら恋愛本なんか読んで

てさ、ムカついたからその本隠したら

あいつ泣き始めて」

呆れた顔をする晴喜。

俊介 「そんでもって、特別授業行きってか。

残念だったな！」

晴喜 「そうゆうこと」

と、ため息をつく。

晴喜 「ま、ごめんなさいだなんて一ミリも

思っちゃいねえよ、特別授業受けると

さ、タダでコーヒーとかケーキ食べる

しな！」

俊介 「はは！ お前も悪だなー」

晴喜 「あの先生はお人よしがすぎる。アホ
だ」

2人で笑いあう。
歌を口ずさむ親子とすれ違う。

俊介 「そういやもうすぐ合唱コンだな。お
前が嫌いな」

晴喜 「ああ、今にも逃げ出したい気分……」
俊介、声を上げて笑う。

俊介 「せいぜい頑張れ、俺こっちだから、
それじゃまたな」

晴喜 「おお、また」
お互いがそれぞれの帰路につく。

○庵野家・リビング（夜）

リビングの固定電話で通話する裕子（
45）。

裕子 「はい、はい、ああ、そんなことが……
はい、すみません何度も……。ええ……」

晴喜にはきつく言っておきます。本当

にすみません……。ありがとうございます。

「した」
裕子、ガチャっという電話の音と共に、ソファでテレビゲームをする晴喜の方を向く。

裕子
「晴喜！ あんたまた人様に迷惑をかけて！ ったく、いい加減にしなさい！」

晴喜
と、大声で怒鳴る。
それにビクツとなる晴喜。
「母ちゃん、驚かせるなよ。……いいと

裕子
「なに言ってるの！ あんた野乃ちゃん

んの私物盗んだんだってね！ 先生から電話があったわよ！ しかも！ た嘘までついて。これで何度目よ！ 今日日は晩御飯抜き！」

晴喜
「え、ちよそりゃないよ母ちゃん！ と、怒鳴る。」

死んじゃうって！

慌てたわめく晴喜。

裕子 「一食抜いたぐらいじゃ死なないよ！

今日はしっかり反省しな！」

と、顔を真っ赤にしてリビングを出て

いく裕子。

庵野浩（43）が口を開く。

浩 「母さんの言う通りだ。先生も毎度お

前の嘘に振り回されて困っているはず

だぞ」

と、新聞を見ながら言う。

晴喜 「なんだよそれ」

晴喜、ふてくされる。

○学校・運動場

たくさんの生徒がドッチボールをして

いる。その中に祐樹も混じっている。

全員で楽しそうにしている。

野乃 「先生、逃げてばかり！」

祐樹 「戦略的逃避というものですよ！」

俊介 「せんりゃ？　なんだ？」

祐樹 「今は逃げた方がよいということです」

俊介 「うそだあ」

野乃 ボールが野乃に回ってくる。

野乃 「晴喜！　覚悟！」

晴喜 全力投球で晴喜に当てる。

晴喜 「ぐはっ」

晴喜、尻もちをつく

野乃 「ふん」

とニヤリとする。

祐樹 「あら」

周りの生徒が笑っている。そこで、チヤイムが鳴る。

祐樹 「はーい、皆さんそろそろ片付けましたようか。次は合唱コンの練習です。遅れないように」

一同、片づけを始める。

俊介 「大丈夫か？」

と、晴喜に近づく。

晴喜 「いってーな」

野乃 「ふん。パーカ」

と言うと、晴喜から立ち去る。

俊介 「まだご立腹だな」

晴喜 「だな」

○学校・音楽室

音楽室から合唱が聞こえる。

めんどくさそうに歌うふりをする晴喜。

合唱が終わる。

祐樹 「いやあ皆さん素晴らしい歌声ですね

！ これだと金賞間違いなしですよ！」

生徒① 「先生、去年も同じこと言っていました

けど賞とれませんでしたー」

冗談らしく言う。

生徒② 「そうそう、あんなに絶対金賞ですよ

！ て言っていたのに」

と便乗する。

祐樹 「えー？ そうでしたっけ？ 私から

したら金賞なんですけどねー。他のク

ラスよりも断然上手！」

笑みを浮かべる祐樹。生徒たちが笑い出す。

生徒③ 「そんなお世辞言っちゃて」

生徒④ 「嘘つかないでください！」

祐樹 「ノ！ノ！ノ！嘘なんかじゃありませんよ！さて、明日はついに合唱コンクール本番です！みなさん張り切っていきましよう！」

晴喜、だるそうな顔をする。

祐樹、晴喜の顔を見て心配する。

○ 同・中庭（夕）

ベンチに座っている晴喜。

祐樹 「ハロ！ですよ！晴喜さん、お元気ですか？」

祐樹が近づいてくる。

晴喜 「先生、この顔を見てもなお元気に見えますか？」

祐樹 「いやー、全然！」

と、笑い出す祐樹。

晴喜 「茶化さないでくださいよ」

と、そっぽを向いて言う晴喜。

祐樹 「何かあったみたいですねー」

晴喜 「知っているくせに」

祐樹 「まあだいたい予想がつきます」

晴喜 「怒られました。みんなに迷惑かける

なって、嘘つくなって」

祐樹 「おや、叱られたのですね」

晴喜 「おかげで夜飯抜かされました。ちょ

っと嘘ついただけで」

苦笑いをする祐樹。

祐樹 「嘘ついただけって、反省してないじ

ゃないですか。いいですか晴喜さん。

嘘なんてつくものじゃありませんよ。

いずればれます」

と、人指し指をピンっと立てて話す。

晴喜 「ごめんなさい。……てあんまり思えな

くて」

真顔で言う。

祐樹 「おやまあ、全く、指導に困りますよ。」

君みたいなのは。そんなことほかの先生に言ったらどうなるか」

あきれ顔をする祐樹。

「祐樹先生だから本音だせませすよ。この性格治りますかね？」

祐樹 「はあ……。信頼されているのか、なめられているのか」

目を閉じる祐樹。

「どっちもです」

祐樹 「あなたはまだ先は長い。治せませすよ」

少し笑みを浮かべる祐樹。

祐樹 「ささ、もう帰りなさい。明日は早いんですからね」

「うわあ、やだなあ合唱コンクール。」

歌うの嫌いなんですよね」

祐樹 「いいじゃないですか」

「嫌ですよ、恥ずかしい。緊張するし、俺歌下手いし」

祐樹 「晴喜の肩に手を置く祐樹。」

祐樹 「大丈夫ですよ、みんながいるではな

いですか」

笑みを浮かべる祐樹。

祐樹 「それに、あなたは嘘が得意なのでし

よう？ 緊張してないと自分に言い聞

かせればいい」

晴喜 「自分に嘘はつけません」

祐樹 「おお、これはこれは、まともなこと

も言えるのですね」

驚く祐樹。

晴喜 「どうも」

空は赤く染まり、カラスが鳴いている。

晴喜 「さよなら先生」

と言いながら祐樹を背にして歩き出す。

祐樹 「はい、さようなら。明日、良い思い

出にしましょうね」

祐樹、一言かけるが、晴喜は返事をし

ない。

○ 同・職員室（夕）

祐樹、職員室に入室し、自分の席に座

りパソコンをいじり始める。その時、隣の席の武田壕（35）が祐樹に話しかける。

壕 「明日、祐樹先生が楽しみにしている合唱コンクールですね。どうですか？

祐樹 「ええ！ 完璧ですよ！ 金賞間違いなしです！」

と満面の笑みを見せる。

壕 「おお、大した自信ですね！ けど、こっちのクラスも負けてませんよー」と眉毛をひそめつつも口角を上げる。

祐樹 「ははは！ これは、好敵手と

いうやつですね」

笑いあう2人。

祐樹 「けど、ちよつと心配なことがありますま

してね」

壕 「はあ、心配事とは」

祐樹 「いや、おおそれたことではないのですが、晴喜君がどうも歌うのが苦手な

「ようで」

壕

「あいつ！ 祐樹先生、それも多分嘘

ですよ。あの子、去年もそんなふうな

こと言っていて、勝手にコンクールから抜

け出して遊びに行っていたの知っている

でしょう？ おかげでクラスは晴喜が

いないって大騒ぎで、結局晴喜無しで

出場ですよ」

少しムツとした顔になりグチグチと話

し始める壕。

祐樹

「そうでしたねえ。ちよっと、目をつ

けときまますかね。でも、嘘ではないと

思うのです。歌が苦手というのはい

壕

「まあ、あの子祐樹先生からたくさん

教えを受けてますからね。知っています

？ あの子、僕にはため口ですよ」

古賀美和（28）が近づいてくる。

美和

「私もですよ。祐樹先生以外ため口。

何度注意してもきかないんですから」

と言いながら祐樹に書類を渡す。

壕 「やっぱりそうですか。困ったもので

すね」

祐樹 「ははは！ また特別授業をしなくて

はいけませんかね」

○ホール・舞台裏（朝）

様々なクラスが合唱の練習をしている。

晴喜のクラスの練習が終わる。

祐樹 「はーい！ いいですねえ皆さん。前

日よりも一段と輝きが溢れています！

本番もこの調子で張り切っていていきまし

ょう！」

晴喜のクラスが盛り上がる。

近くにある椅子に腰をかける晴喜。そ

こに俊介が近寄ってくる。

俊介 「もうすぐだな。赤面する準備はでき

たか？」

とどや顔をする。

晴喜 「うぜーなその顔。むかつく」

とジト目をする。

俊介 「ははは、冗談だよーだん。俺たち4組目だったな。トツプバッターじゃなくてよかったぜ」

晴喜 「お前も嫌なの？」

俊介 「どっちかというところ嫌。てか何事も最初って嫌じゃね？」

晴喜 「分かる。でも最後の方が嫌かな。あの圧倒的クオリティを求められる感じ」

俊介 「あー分かる」

晴喜 「まあ俺には関係ないけど」

俊介 「おい、今年も抜け出す気か？ やめとけって、さすがに相当怒られるぞ」

晴喜 「歌うぐらいならたっぷり怒られた方がマシさ」

俊介 「本気かよ。てかどう抜け出すんだよ」

晴喜 「トイレに行くっつって帰らない。去年もこうした」

俊介 「お前、トイレ禁止になるぞ」

晴喜 「はは、あり得るかも」

俊介 「と笑い出す俊介。」

と、晴喜も笑う。

駿介

「なんかトイレの話してたらトイレに行きたくなかったじゃねえか。ちよっ

晴喜

「おう」

俊介、小走りで去っていく。

○同・ステージ観覧席（朝）

1組目のクラスが合唱をしている。

1組目の合唱が終わる。

観覧席で拍手が起こり、1組目のクラ

スは退場し、2組目のクラスが入場す

る。そこでクラス説明のアナウンスが

流れる。

晴喜、席を立ち祐樹のところに行く。

晴喜

「先生、トイレに行ってください。ちよ

祐樹

「おや、それは大変ですね。分かりま

した」
ホールから出ていく晴喜。

壕が祐樹の方を見て頷く。

祐樹、こめかみをかく。

2 組目の合唱が終わり退場する。

○ 同・外 階段 踊り場

ふー、と息を吐く晴喜。

雲が点々とする青い空を眺める。

鳥もさええずり、車のクラクション音が

聞こえる。

祐樹 「見つけましたよ。晴喜さん」

と腕を組んで晴喜を睨みつける。

晴喜 「先生？　なんでここが分かったんで

すか？」

少し驚いた顔をする晴喜。

祐樹 「あなたのことです。あまり見つからないような場所にいると思いませんか。やっぱりトイレは嘘だったんですね。

シヨックです」

俯く晴喜。

祐樹 「さあ、もうすぐあなたたちの番です

早く戻りましょう。ほら、他のみんなもあなたを待っていますよ」

晴喜 「戻りたくないです。歌、下手だから」

祐樹 「大丈夫、上手か下手かなんていうのは問題じゃありませんよ。どれだけ仲間と1つになれたか。そこが大事なんです。合唱コンクールに限った話ではありません。合

晴喜 「大問題ですよ。それで歌ったら周りの奴がバカにしてくるに決まっています」

祐樹 「そんなことないですよ。ほら、自信を持って」

祐樹が晴喜の腕をつかむ。

晴喜 「やめてください、離してください」

祐樹 「大丈夫です。みんながいます」

晴喜 「それでも嫌なんですって」

祐樹 「みんなと歌えば意外と楽しいですよ！ 1度騙されたと思っ……」

晴喜 「嫌なんだってば！」

祐樹の腕を強く振りほどき、強く押す。

その衝撃でうろたえ、階段から転落してしまおう祐樹。

祐樹 「うわあああああああああ」

ドタドタドタと転げ落ち、頭からは血

が流れ始め、微動だにしない。

晴喜 「せ、先生？」

心臓がバクバクと音をたてる。

晴喜 「そんな……」

おどおどとする晴喜。そこに、他の先

生たちが現れる。

先生 ① 「どうした！　すごい悲鳴だったぞ！」

先生 ② 「きゃあああああ」

と悲鳴を上げる。

先生 ① 「まずい……。誰か！　誰か救急車を呼

べ！　君は大丈夫か？」

先生 ③ 「頭の出血を止めないと！　有岡先生

！　タオルを！」

○ 同・観覧席

生徒たちが大騒ぎする。

生徒⑤ 「何？何が起きてるの？」

生徒⑥ 「誰か倒れたのか？」

野乃が心配そうにする。

○同・階段踊り場

美和 「救急車呼びました！」

先生① 「祐樹先生！祐樹先生！」

と肩を揺らす。頭の傷口にタオルを

押し付け、出血を試みる。

祐樹、びくもしない。

晴喜 「うわあああああああ」

晴喜、泣き始める。

壕 「お、落ち着け！晴喜！な、祐樹

先生は大丈夫だから！」

晴喜 「うわあああああああああ」

大粒の涙と鼻水を垂れ流す晴喜。

遠くから救急車の音が聞こえる。

晴喜の鳴き声が街に響き渡る。

○同・正面玄関

救急車が出発する。

美和 「晴喜君、何があったの？ 正直に話

してごらん」

と優しめの口調で話す

晴喜 「階段のところで……。休んでたら、先生

がやってきて、それで、先生……。階段

で足踏み外しちゃって……。それで……。」

泣きべそをかきながら話す。

美和 「分かったわ。それ以上何も言わなく

ていい」

美和、晴喜を抱きしめる。

晴喜 M 「嘘つき」

晴喜、震える。

晴喜 「ああ、あああ」

晴喜、ひざまづく。

美和 「ど、どうしたの？ 晴喜君！ 大丈

夫！」

晴喜 「……」

目の前がぼやけ始める。

美和 「ねえ！ 大丈夫？ 晴喜君？ 晴喜

君！」

目の前が真っ暗になる。

○庵野家・晴喜の部屋（夕）

ベットのうえで目を覚ます晴喜。

時計の音がなっている。

隣で浩が座って本を読んでいる。

治 「おう、起きたか。よかった、心配し

たぞ」

晴喜、治の顔を見る。

治 「学校から、晴喜が急に体調が。って

電話がきたものだからびっくりしたよ。

母さんが慌てて出てって、帰った時に

は晴喜寝てたからさ」

晴喜 「そう……」

晴喜、俯く。

治 「……先生のごときは、残念だな。……話は

聞いたよ。今まですごく良くしてくれ

た」

晴喜 「残念だった……？」

目を見開く晴喜。

治 「あ、ああ……。そっか、晴喜はまだ知らないか」

口ごもる治。

治 「ついさっき……。ね。亡くなったんだ。

失血死だった」

晴喜、涙をぽたぽたと流す。

治 「辛かっただろう。怖かっただろう。

事故といい、目の前で人が亡くなった

んだ。大丈夫、大丈夫」

晴喜 「ううう……」

晴喜の背中をさする治。晴喜の部屋に

裕子が入ってくる。

裕子 「晴喜！ 心配したんだよもう」

治に代わり、晴喜を抱きしめる。

晴喜、また声を上げて泣き出す。

○ 葬儀会館・葬儀場

たくさんの人が浮かない顔をして話をしている。その中でも晴喜は控えめに

言って絶望をした顔つきでいる。

時々小刻みに痙攣が起こる。

晴喜、野乃を見つける。

野乃、壁にもたれかかってうずくまっ

ている。

裕子が、野乃の母親にお辞儀をする。

それに気づいて、野乃の母親もお辞儀

をする。

辺りを見渡す晴喜、遠くの方に他の先

生たちやクラスメイト、俊介も見える。

俊介が晴喜に気づく。

告別式が始まり、弔辞が始まる。

男性 ③ 「祐樹先生のご霊前に謹んでお別れの

言葉を申し上げます。祐樹先生は……」

晴喜、俯いて失望した顔をする。その

顔は周りのよりも一層暗い。

男性 ③ 「……強く、優しく、そして誰よりも使

命感のある方で、私たちに家族のよう

に振舞ってくださりました。……」

晴喜、だんだんと手足が震える。

男性 ③ 「それが……。それがたった一人の少年

に命を奪われました」

晴喜、はっとする。

男性 ③ 「許しません。私たちは彼を許しませ

ん。彼は、事故という嘘までついたの

です。許せるはずがありません」

男性が晴喜を見る。

全員が振り返り、晴喜を見る。

一同 「嘘つき。嘘つき。許さない。嘘つき。嘘つき。……」

嘘つき。許さない。嘘つき。嘘つき……」

一同、目が血走っている。

晴喜、動揺し、震えながら目をつむる。

その時、俊介の声が聞こえる。

俊介 「……おい。……はる。……だい。……おい、

晴喜、大丈夫かって」

晴喜、目を覚まし俊介の方を見る。

俊介 「ぼーとしてたから心配したぜ」

と小声で言う。

晴喜、周りを見渡す。

お坊さんがお経を唱えている。

周りはお経に集中しており、ところどころ泣き声も聞こえる。

晴喜 「え……。あ……」

うろたえる晴喜。

俊介 「大丈夫か」

晴喜 「あ、大丈夫。ごめん」

晴喜、祐樹の遺影を一目見て、すぐにうつむいて目を閉じる。

○葬式会館・外（昼）

葬式が終わり、人々が会話をしている。大きな木の下で晴喜と俊介と野乃が立っている。

俊介 「先生、本当に残念だな」

野乃 「事故死だなんて、ありえない」

野乃が晴喜を睨みつける。

野乃 「あんたがあの時逃げ出さなければ先

生は死ななかつたよ」

俊介 「おい、やめろ」

真顔で口止めをする俊介。

野乃 「私たちの先生を返してよ。ねえ。ね

え！」

晴喜に殴りかかる野乃。

俊介 「だからやめろって！」

晴喜から野乃を引き離す俊介。

野乃 「あんたのせいよ。このひとでなし！」

と言葉を吐いて去っていく。

俊介 「なんだあいつ。晴喜、お前のせいじ

ゃない。事故なんだから」

晴喜 「……」

晴喜、体操座りで自分の腕に顔を埋め

る。

俊介 「足を踏み外すなんて先生らしくない

よな」

晴喜 「……」

晴喜、びくともしない。

その時、俊介を呼ぶ、母親の声が聞こ

える。

俊介 「じゃあ、俺も帰るから。またな」

晴喜の元を去る俊介。

晴喜、俊介が遠くに去った後、顔を上げて青い空を眺める。溢れてくる涙を必死にこらえてゆっくりと目をつぶる。
（晴喜視点で、目を閉じると同時に暗転）

○喫茶店・2人席（夕）

ゆっくりと目を開く晴喜。

目の前には微笑んでいる祐樹が座っている。
いる。

晴喜 「先生、私は本当にどうしようもないクズです」

と真剣な眼差しで祐樹を見つめる。
晴喜 「あなたは、私に殺された。私の嘘が

あなたを殺しました」
祐樹 「私はそうは思いませんよ」

微笑む祐樹。
晴喜 「あなたを殺した張本人が今ここに

いるのによく笑顔でいられますね」
祐樹 「だって、あれはあなたの意

晴喜

「何が言いたいのですか？」

「何をなかつたことにしようとしていた」

「何年間も自分の感情を押し殺して、真

ら、1つだけ嘘をついていたんですよ。

祐樹

「あなたは今まで嘘が嫌いといいなが

晴喜

「何のことでしょうか」

「した」

「ましたね。辛いことをよく思い出しま

祐樹

「よろしい！晴喜さん。よく頑張り

晴喜、膝の上でぐっと拳を作る。

「人よしがすぎる」

晴喜

「やっぱりあなたはアホだ。本当にお

顔をひきつらせる晴喜。

晴喜

「どこまでお人よしなんですか」

と優しく微笑みかける。

「ね。無理をさせようとして」

聞けばよかつたのです。ごめんなさい

の時、もっと晴喜さんの意見を冷静に

うとしたのが間違いだったのです。あ

いでしよう？私が無理に連れて行くこ

祐樹

「1番ついてはいけない嘘は、自分自身につく嘘だということですよ」

晴喜。黙り込む。

祐樹

「辛い現実は、どう頑張っても忘れない。としたって無駄です。必ずあなたの心の深淵に深く根付いている。一生あなた

の心で、あなたと共に生き続けます。

大事なのは、その現実に向き合う勇氣

ですよ」

晴喜、顔を上げて、少し笑みを浮かべ

る。

晴喜

「自分が嘘を嫌う理由。思い出しました」

祐樹、微笑みながら頷く。

晴喜、冷え切ったコーヒーを一口すす

る。

晴喜

「でも、実際のところ、本当のあなた

は私のことをどう思っているのでしょ

うね」
祐樹、少し黙り込む。

祐樹

「私は今でもあなたのことを教え子として大切に想っていますよ」

晴喜

「それは私の願望です。今のあなたは、私の記憶からできています。私の願いで構成されているはずですよ。本当のあなたとは、私は、私のことを恨んでいるに違いありません。みんなも、本当のことを言えば私を嫌悪するでしょう」

祐樹

「晴喜さん。もう一度いいますね。私はあなたの味方なのです。大切な教え子なのです。あれは事故。君がやったんじゃない。あの時はまだ子ども、感情が爆発するのも仕方ないことです。みんなも分かってくれますよ。いい子たちだから」

晴喜

「いや、そんなはずは……。違う……」

祐樹

「確かに今の私は君の中の私。君が、先生ならこう言うだろうという想像が具現化されてできている。けど、その

具現化はあながち間違っていないと思
いますよ」

晴喜 「けど……！」

ハッとする晴喜。目の前にいた祐樹は
消えてなくなり、気が付くともう一人
の晴喜が座っている。

晴喜 2 「先生なら、きっと許してくるさ」

晴喜、驚き、少しの沈黙の後、口をつ
むぐ、そして開く。

晴喜 「俺はそうは思えない。だって、殺し
てるんだぜ？」

晴喜 2 「なぜそこまで悩む必要がある？ よ
く知っているだろ。あのアホみたいに
お人好しな先生を」

晴喜 「分からない。けど、自分を殺した人
間を恨むのは当然のことだろう」

晴喜 2 「分からないか。悩む理由が皆無なら、
解決方法もままならないな」

晴喜、もう一人の晴喜を睨みつける。
晴喜 2 「だがまあ、言う通りではある。殺さ

れたら誰だって恨むだろうな。でも俺は先生なら許してくれると信じている」

晴喜 「その根拠は何なんだ」

晴喜 2 「分からない」

晴喜 「お前だって分かっているじゃないじゃない

か」

晴喜 2 「信じることに理由は必要か？」

晴喜 「何が言いたい」

晴喜 2 「もっと先生のこと、信頼してもいい

んじゃないかなんて、もう答えはだせねえだ

ろうが」

晴喜、黙り込む。

晴喜 2 「だったら、信じたほうが気持ちも楽

だろ」

晴喜 「……」

晴喜 2 「このまま真実を隠すのもよくない」

晴喜 「分かっている」

晴喜 2 「みんなには伝えなきゃ」

晴喜 「ああ、けど怖い」

晴喜 2 「なぜ？」

晴喜 「多分、もう友達なんて思ってたくな
い」

晴喜 2 「正直に言えば分かってくれる」

晴喜 「分からねえよ。人を殺した人間を理
解してくれる奴がいるか」

晴喜 2 「……」
頭を抱える晴喜。

晴喜 2 「ああだろう、こうだろうって、馬鹿
馬鹿しい。意気地なし」

晴喜 「あ？」

晴喜 「お互いがお互いを睨みつける。

晴喜 2 「そうやって、悩みまくって一歩下が
ったところで何が変わる。自分の中だ
けで抱え込んで、勝手に病んで、バカ
じゃねえの。お前みたいな他人に助け
を求められねえ人間を、意気地なしっ
て言うんだよ」

晴喜、唇を噛み締める。

晴喜 2 「俊介も野乃もみんなも、てめえの嘘

に何十年振り回されてると思ってる。
何が嘘が嫌いだ。嘘大好きじゃねえか
！
と、あざ笑うような顔で大声を上げる。
晴喜 「俺だって嘘つきたくてついてんじや
ねえよ！」
晴喜、大声を上げる。
晴喜2 「いつまでオオカミ少年なんだよ。い
や、オオカミ中年か。いいか、お前自
身もお前の嘘に振り回されている。自
分につく嘘が一番しようもねえ」
沈黙が流れる。
晴喜2 「本当はみんなに助けてほしかったく
せに」
晴喜、下を向いたまま黙り込む。
晴喜2 「考えたってもう仕方がない。信じよ
う。先生を。みんなを」
二人の晴喜が互いの顔を見合わせる。
晴喜2 「俺、お前のことも信じているぞ」
もう一人の晴喜が消える。

晴喜、机のうえにぼたぼたと涙を落とす。静かに泣いている途中、過呼吸になる。一時して、手を上げる。

晴喜 「お会計。…お願いします」

店員 「かしこまりました」

晴喜、飲み干した空の一杯のコーヒーと、全く手をつけていない冷え切ったコーヒーを後に、会計をして出ていく。

○喫茶店・店前（夕）

喫茶店の前でポケットから煙草を取り出す晴喜。

煙草の箱には残り一本しか入っていない。

煙草を口にくわえようとした瞬間、電話がかかってくる。

晴喜、しぶしぶ電話にでる。

晴喜 「もしもし」

俊介 「もしもし、おっすー元気してるかい」

晴喜 「ああ。まあ。ぼちぼち」

俊介 「明日の話なんだけどさ……」

晴喜 「……ああ、ああ。わかった」

晴喜、赤く染まる空の下、電話をしなが
らゆっくりとした足取りで道の真ん
中を歩く。

○ 墓場 ・ 道半ば

晴喜、大きなリュックと手荷物を持っ
て歩いていている。

ちよつと先で俊介と山口野乃（30）

が待機している。

晴喜、2人に近づく。

俊介 「よお、久々……。て、なんだその荷物
？」

野乃 「旅行にでも行く気？」

晴喜 「昨日家を追い出された」

真面目な顔で答える。

俊介 「ははは！ ついに追い出されたか！」

野乃 「何やってんのあんた」

と大笑いする2人。

晴喜

「笑いごとじゃない」

と少し眉をひそめる。

野乃

「どーするのこの先」

晴喜

「とりあえずバイトでまかなうしかない

野乃

いかな、一時は」

晴喜

「働く気ないの？」

晴喜

「働けたらどれだけ幸せだろうな。す

でに何度も選考落ちてるんだよ」

と真面目な顔で答える。

俊介

「辛いな、それ……」

野乃

「ちよつとガチな顔しないでよ。ごめ

んって」

と不安げになる。

晴喜

「いや、怒ってねーって」

晴喜、周りを確認する。

俊介

「行こうか」

野乃

「行こ行こ」

3人が横一列になって歩き出す。

晴喜

「俊介は今何してるの？」

俊介 「俺は今自動車整備してるよ。毎日力

仕事で嫌になるよ本当。人手不足でね。

ここ最近残業ばっか」

晴喜 「大変なんだな。野乃は？」

野乃 「私は中学教師。ねえ聞いてよ、こな

いだ教頭がセクハラしてきたの。なん

か腕とか触ってきて！ まじキモイ！」

大笑いする俊介。

俊介 「その年でセクハラされるはうけるぞ」

野乃 「はあ？ 30はまだ若い方でしょ」

晴喜 「その……。大変だな。教師か」

俊介 「昔から言ってたもんな。教師になる

って」

晴喜 「なぜ先生に？」

野乃 「決まってるじゃん。祐樹先生みたい

になりたかった」

目を輝かせる野乃。

野乃 「深切で、情熱的で、いつも生徒の立

場になって接してくれる優しい先生。

昔から憧れだったから」

晴喜 「そうか……」

野乃 「でも、現実はその上手くないかなくて。

ぜんっぜん生徒は私の言うこと聞いて

くれないし、イライラしちゃう」

俯く野乃。

晴喜 「なれる」

野乃 「え？」

晴喜 「なれるさ、祐樹先生みたいに」

野乃 「……うん、ありがと」

微笑む野乃。

俊介も微笑む。

俊介 「お前はとうするんだこれから。無職

なんだろ？」

晴喜 「適当にぶらぶらするさ」

俊介 「おいおい、死んじゃまうぞ？ 飯食え

るぐらいにはなっとかねえと」

晴喜 「まあな」

晴喜、お腹がなる。

野乃 「あんだ、もしかして今日もなんも食

べてない？」

晴喜 「ああ、今日は食べない日だから」

野乃 「なにそれ。食べなきゃだめだよ」

晴喜 「大丈夫。1日飯抜いたぐらいじゃ死

野乃 「いやいや、だとしてもその積み重

ねはよくないよ」

俊介 「まったたく……。今日のお昼は奢ってや

晴喜 「さんきゅ」

○同・墓前

先生の墓前に着く。

3人でお墓の掃除、供え物をする。

俊介が線香を供え、3人で合掌する。

合掌が終わり、野乃、俊介、晴喜の順

に目を開く。

野乃 「先生、遊びにきたよ」

俊介 「御無沙汰してます！」

俊介、改めてお辞儀をする。

俊介 「先生、晴喜のやつ、就職もせず

の

の

うのうと生きています。叱ってやって
ください」

晴喜 「おい、やめろ」

野乃 、声を上げて笑う。

野乃 「多分、先生が生きてたら特別授業行

きだったね」

俊介 「相当心配すると思うぜ。お前のこと」

晴喜 、お墓の目の前に立って頭を下げ

る。

晴喜 「お世話になりました」

野乃 、首をかしげる。

俊介 「晴喜にとって、今回が初めての墓参

りなんだよ」

と小声で野乃に伝える。

野乃 「あー、なるほどね」

晴喜 、頭を上げる。

野乃 「先生、生きていてほしかったな」

俊介 「そうだな。生きていたら今頃一緒に

飲んでただろうな」

野乃 「うん。楽しかった、あの頃は」

少し静寂になる。

野乃 「確か晴喜はいつも叱られてなかった
？」

俊介 「ああーそうそう。宿題を脅迫して他の奴にさせたりとか、他人の机にゴキブリ隠して反応を楽しんだりして、でもって毎回その場のぎの嘘ついてた。まあだいたいはばれなかったっていう」

野乃 「嘘つきの天才だったもんね。私の本盗んだ件も許してないから」

晴喜 「勘弁してくれ、先生の前だぞ」
俊介と野乃、笑う。
俊介と野乃、そのまま昔話に花を咲かせる。

晴喜、お墓をじっと見つめ、数秒間目を閉じる。そしてゆっくりと目を開く。
「ごめんなさい。先生、俺が嘘をついたばかりに」
俊介、やれやれという顔で晴喜の方を向く。

俊介 「まだ言ってるのか？ お前のせいじゃないって」

野乃 「そうだよ。昔はあなたのせいなんて思ってたけど、今は違う。ごめん」

晴喜、大粒の涙を流し始める。

晴喜 「くそ……」

俊介 「晴喜、先生はお前のその顔見るの、望んでないぞ」

野乃 「うん。大丈夫だよ。大丈夫。晴喜が悪いんじゃない」

晴喜、涙を流し続ける。

俊介 「まったく……。分かった。気が済むま

で泣け、俺たちはそばにいるから」

風で3人の髪がなびく。

晴喜、涙をぬぐう。

俊介 「気はすんだか。よし、そろそろ帰ろ

うか」

野乃 「うん、お腹すいた」

俊介と野乃が帰ろうとする。

晴喜 「なあ、俺って嘘つきかな？」

唐突な質問に戸惑い、足をとめる俊介と野乃。

俊介 「いや。今はびっくりするほど正直だ方を向く。」

野乃 「何か。正直か」

晴喜 「お前たちに言っとかなきゃいけないと苦笑いをする。」

俊介 「なんなんだよ。真面目な顔して」と笑う。

晴喜 M 「ごめん先生。どうしたらいいかわからない。でも、伝えなきゃと思った」

晴喜 「これ以上、自分にもお前たちにも嘘はつけない」

晴喜、お墓の方から俊介と野乃の方を向く。

晴喜 M 「今、するべきだ」

晴喜 「先生が亡くなったあの日、あの時」

俊介と野乃、真剣な顔つきで晴喜を見つ

める。

晴喜 M 「告白を」

晴喜 「先生を殺したの」

（ブラツクアウト）

晴喜 「俺なんだ」

△
了
▽